

英語学習が日本語母語話者の認知に与える影響：  
ボディーパーツの切り取り方をめぐって

村端佳子

キーワード：第二言語習得、第二言語の母語への影響、マルチコンピテンス、バイリンガルの認知

1. はじめに

本研究の目的は、日本語母語話者が第二言語としての英語を学ぶことで、日本語の使用や認知になんらかの影響が見られるかどうかを、体の部位を表す言葉に関して調査することである。近年第二言語の学習や使用が母語話者の言語の使用や認知に何らかの影響を与えているという研究が多くなされている(Cook, 2002)。日本語を母語とする話者に関しても、色彩(Athanasopoulos, Damjanovic, Krajciová, & Sasaki, 2011; Murahata, Murahata, & Murahata, 2017)、名詞の複数形(Cook, Iarossi, Stellakis, & Tokumaru, 2003; Murahata, 2012)、分類(Murahata, 2012)などに関する英語学習の影響が報告されている。それでは日本語母語話者が英語を学ぶことで、体の部位の切り取り方になんらかの影響を受けるのだろうか。例えば、日本語の「手」は英語の arm と hand の両方を、「足」は leg と foot の両方を指すことがある。また、英語の head には、日本語の「頭」「顔」「首」が、back には「背中」「腰」が含まれる。二つの言語に見られるこのような差のために、二言語使用者(バイリンガル)の言語使用や認知に単一言語話者(モノリンガル)とは異なる差が見られれば、それはマルチ・コンピテンス(multi-competence)の証左となり(Cook & Li, 2016)、バイリンガルのユニークな側面を見ることができる。そこで、本研究では日本語を母語とする英語ユーザを参加者として、英語の能力によって二つのグループに分け、「手」「腕」「足」「脚」「頭」「背中」を指す部分の色ぬり実験を行うことで、英語学習・使用が体の切り分け方になんらかの影響を及ぼしているかどうかを探った。

2. 二言語使用者にみられる第二言語の母語や認知への影響

最近のバイリンガル研究では、第二言語が話者の第一言語や認知に与える影響が多く報告されている。たとえば、ロシア語を母語としヘブライ語を第二言語とする話者に見られる第二言語の影響としては、ヘブライ語の習得により母語であるロシア語では通常使用しない動詞の使用容認度が高くなることが報告されている(Laufer, 2003)。すなわち、通常ロシア語では「テレビを消す」と言う場合には、‘Ja gykluchil televizor’ (テレビのスイッチを切る)と言うが、ヘブライ語の習得がすすむとヘブライ語表現の影響を受け ‘Ja

zakryl televizor' (テレビを閉める) という表現を容認する度合いが高くなるようである。また、ロシア語を母語とする話者が英語を第二言語として習得することで、英語の privacy (私的な自由) という概念を表現するために 'emotion' (感情) 'feelings' (感情・気持ち) 'solitude' (孤独) に相当するロシア語を使った表現方法が見られた。そもそも privacy という概念がロシア語にはないので、これらの表現はロシア語のモノリンガルには見られないバイリンガル特有のものである (Pavlenko, 2003)。日本語母語話者を対象とする研究では、競合モデル (competition model) (Bates & MacWhinney, 1981) を用いた実験で、日本語と英語のバイリンガルは「たち」のついた複数を主語として選択する傾向にあり、日本語のモノリンガルとは異なる反応を示すという実験結果が出た (Cook et al., 2003)。さらに、冠詞や名詞の複数形をもたない日本語を母語とする英語ユーザは、「ライオンは獰猛な動物だ」などの文にみられる総称名詞の解釈が、第二言語の英語を学ぶことでよりの確になる、という研究結果も出ている (Murahata, 2012)。

第一言語の使い方や理解への影響だけではなく、認知への影響も報告されている。色の名称が色の記憶や認識に影響を与えるのではないかという研究は、1950年代からあった。たとえば、青・緑・紫の3色に当たる語彙を一つしかもたないナヴァホ語話者は、英語を学ぶことで黄色と緑色を混同する頻度が高くなった (Ervin, 1961)。また韓国語、日本語、ヒンディー語、広東語、北京語の母語話者は、英語を第二言語として学ぶことで色の認識が変化したことが報告されている (Caskey-Sirmons & Hickerson, 1977)。つまり5つの各言語と英語のバイリンガルは、各言語のモノリンガル母語話者と比較すると、実験参加者間で色の中心色によりばらつきが見られ、しかも英語母語話者が示す中心色に近い色となった。日本語母語話者にみられる英語の影響は青色に関して行われた。日本語では青と水色を区別するが、英語では区別しない。そのために英語の能力が高いグループは二つの色をあまり区別しなくなる、という結果がでている (Athanasopoulos et al, 2011)。また「サル・パンダ・バナナ」などの3つ組課題を用いた実験で、日本語話者と英語話者では分類方法が異なり、英語学習の影響で日本語母語話者の分類方法は英語話者のそれに近づく、という研究結果も報告されている (Murahata, 2012)。

このように第二言語の習得・使用がすすむことで、第一言語あるいは母語の使用や母語話者の認知活動に何らかの影響が出るとすれば、体の部分 (以下、ボディパーツ) を表す言葉の使用やそれに関わる認知にも何らかの影響が見られるのではないだろうか。人体はどの社会でも人間によって視覚的・感覚的に同様に知覚され、従って体の部分の切り取り方や、それぞれを示す名称は文化や言語を超えて多くが普遍的なものであると考えられがちである。が、実はそうではない。たとえば、ソロモン諸島で話されるラヴカリーブ語 (Lavukaleve) では「腕」と「脚」を表す単語が同じであるし、マレーシアの一言語ジャハイ語 (Jahai) には「頭」「胴体」「腕」「脚」に相当する語がないという (Majid, 2010)。また、インドネシアのティドール語 (Tidore) では、足の先から膝を超えて大腿部分の下から4分の3位までの部分を指す言葉があるという。もちろん外見上、足のその辺りになんらかのくびれや切れ

## 英語学習が日本語母語話者の認知に与える影響：

### ボディーパーツの切り取り方をめぐって

目があるわけではないし、ティドール語を話す民族がすべてその辺りまでの衣服を着用しているというわけでもない。おそらく社会的にタブーとされる生殖器の部分が、その社会では腿の膝上4分の3位までの部分から上のあたりを指すと考えられ、そこに言語による切れ目があったのではないかと推測される(van Staden, 2006)。

さらに、異言語間で同じように「腕」にあたる言葉があるとしても、オランダ語話者、日本語話者、インドネシア語話者にそれぞれ *arm*, *ude*, *tangan* に当たる部分に色を塗るという課題を与えて実験を行ったところ、その部分は必ずしも一致するとは限らないことが明らかになった。オランダ語話者にとって *arm* に当たる部分は、腕の付け根部分から指先までで実験参加者間ではほぼ一致したものであった。ところが、日本語話者にとっての *ude* は腕の付け根部分から手首を含む部分までが一般的ではあるが、腕の付け根部分と手首から先の部分が必ずしも実験参加者間で境界部分が一致しなかった。日本語では一般的に「腕」には手首から先の「手」の部分は含まれないかもしれないが、中には手首から先の部分を含めて「腕」とみなしている日本語母語話者がいるようである。また、インドネシア語の *tangan* には手首から先も含まれることは実験参加者間で一致したが、腕の付け根部分の境界線は一致しないという結果が出た(Majid, 2010)。では、このように異言語話者間で切り取り方が異なれば、バイリンガルに目を向けた場合、たとえば日本語母語話者が英語を学ぶと、その切り取り方が変化するのであろうかという疑問が生じる。ここではボディーパーツのなかでも「頭」「手」「足」「背中」を取り上げてみる。

日本語と英語のボディーパーツを比較するとき、まず取り上げられるのが「頭」と「顔」の違いである。日本語の辞書『新明解国語辞典第7版』で「頭」をひくと「動物の体の中で最も上(前)にある部分。前面に目(・鼻)・口があり、内部に脳を収める」という説明がまずあり、次に「狭義では、人の顔の上部、毛の生えている部分を指す」という説明が続く(山田他、2012)。他の辞書では「顔と区別される髪の部分」(林・尚学図書、1985)や「顔の後ろ側の部分」(中道、2012)などという記述が見られる。一方英和辞典で head の項目を引いて見ると、「(顔を含めて) 頭、頭部、首(小西他、1987)」、「(顔も含めて) 頭、頭部(日本語では「顔」や「首」と訳す方がよいこともある)(青木他、2011)」という説明が見られ、日本語と英語ではその示す範囲が異なるという注意が示されているのが興味深い。さらに shake one's head は「首を振る」(小西他、1987)、Don't put your head out of the window. は「窓から顔を出すな」(青木他、2011)という訳語が与えられている。

同様に英和辞典での back の項目を見ると「うしろ、裏、奥(反 front)」という意味もちろんあるが、人の背中にあたる説明は「背、背中(肩から尻までをさす)」(青木他、2011)とか「背中、背、腰(首(neck)から臀部(buttocks)を指す)」(井上・赤野、2013)と日本語の背中よりも広い部分を指すことが付け加えられている。

日本語の「手」は日本語の辞書には、まず「肩から指先までの全体。うでやひじ、てのひらや指などがふくまれる」との意味があり、次いで「手首から先の部分」となっている(林・尚学図書、1985)。「手首から指先の部分」という記述が先に来て「肩から指先までの部分」

という記述が後になっているものもあるが（中道、2012）、いずれにせよ肩から指までの全体部分を「手」と呼ぶことができる。英和辞典で hand の項目をひくと日本語の「手」と異なり、「手首より先の部分」（青木他、2011）との記述が見られる。次に日本語辞典で「あし」をひいてみると、「あし」は漢字で「足」「脚」の二つがあり、「動物の体を支えたり、動かしたりすることに用いる器官。人間では足くびから下の部分を指す「足」と、骨盤と足首との間を指す「脚」とを区別することもあるが、一般には両部分の総称として用いる（林・尚学図書、1985）」と説明が加えられている。すなわち英語では leg と foot を区別するが、日本語ではその区別が英語ほどはっきりしてはいない、と言えよう。

このように、日本語と英語ではボディパーツの切り取り方が異なり、まとめると次のようになる。

英語	日本語	
arm	手	腕
hand		手
leg	足	脚
foot		足
head	頭	
	顔	
back	背中	
	腰	

表1 英語と日本語のボディパーツの切り取り方の差

すなわち、日本語の「手」は「手首から先」を指すこともあるが、一般的には人体から先の部分つまり英語の arm と hand に当たる部分を指し、日本語の「あし」は「脚」と「足」を区別されることもあるが、「足」は英語の leg と foot の両方を指すこともある。一方、英語の back は日本との「背中」から「腰」に当たる部分を指し、head は日本語の「頭」と「顔」の両方を指す、ということである。

そこで本研究では、日本語母語話者が英語を学習し長期に使用した場合、ボディパーツの切り取り方はなんらかの影響を受けるのであろうか、ということについて調べることにした。参加者は日本語を母語とする英語ユーザで、英語能力に従って二つのグループにわけ、「手」「腕」「足」「脚」「頭」「背中」の6つのボディパーツに関して色ぬり課題を与え、二グループを比較する。

### 3. 本研究

## 英語学習が日本語母語話者の認知に与える影響：

### ボディパーツの切り取り方をめぐって

#### 3. 1 研究の目的

本研究の目的は、日本語母語話者が英語を学習したり使用したりする際に、日本語とは異なる切り取り方をするボディパーツの語彙に触れることで、英語の影響により日本語でのボディパーツの切り取り方になんらかの影響が現れるかどうかを検証することである。

#### 3. 2 研究の参加者

本研究には、九州内にある大学の大学生1～2年生53名（男性24名、女性29名）が参加した。参加者は、小学校から英語を学校外で習っていた8名を除いて、中学校から英語学習を始めた学生である。また、1ヶ月から3ヶ月の語学留学経験を持つ学生が5名いたが、英語圏での長期にわたる居住経験者はいない。つまり、参加者は概ね日本に在住し、学校で教科として英語を学んできた日本語母語話者の大学生である。参加者は、英語のボキャブラリーテスト (Nation, 2001) により英語の能力が高い上位グループ29名と、下位グループ24名に分けられた。このボキャブラリーテストは、英語能力別のグループ作成のためにしばしば用いられるテストである (Cook et al., 2003)。90点満点のテストで、英語能力の高いグループの平均は56.4点、低いグループの平均点は34.5点で、グループ間の差は  $t$  テストで有意差があった ( $t=-9, 294, df=51, p<.00$ )。

#### 3. 3 研究の材料と課題

実験課題は、図1が示すような体の部分を表す図を提示し、それに「手」「頭」「足」「背中」「腕」「脚」のそれぞれに当たる部分に色を塗るという課題である。たとえば、「『手』の部分に色を塗ってください。」というような指示文を与えた。「手」と「腕」、「足」と「脚」の色ぬりには同じ図を用いた。また6つの色ぬりは「手」「頭」「足」「背中」「腕」「脚」の順番で行い、途中で前に戻らないようにという指示も与えた。つまり「手」の色ぬりをした後で、「腕」の色ぬりまで進んだ時に、再度「手」に戻って修正を加えることはできないようにした。

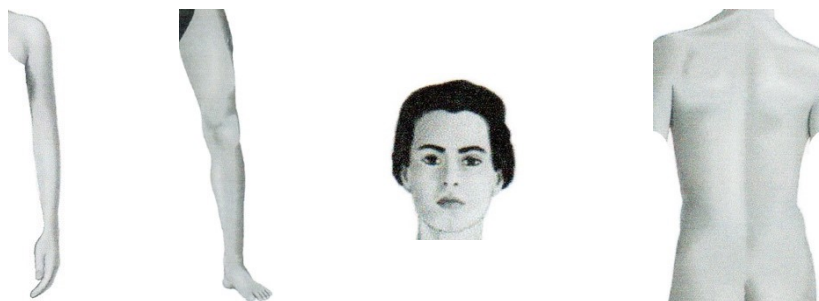


図1 実験に用いた体の絵

### 3. 4 仮説

次のような仮説を立てた。

- (1) 英語能力が上位のグループは英語学習および使用の影響を受け、英語能力の下位グループよりも「手」「足」を示す領域が狭くなる。これは表1にあるように英語では hand/arm と foot/leg の区別をすることから「手」は hand、「足」は foot の切り取り方により近づくのではないかとと思われるためである。
- (2) 英語能力が上位のグループは英語能力の下位グループよりも「頭」「背中」を示す領域が広がる。これは表1にあるように、英語の head には「頭」と「顔」が含まれ、back には「背中」と「腰」が含まれることから、英語による切り取り方により近づくのではないかとと思われるためである。

### 4. 結果

課題に従って色ぬりをされた部分は、図2にあるように分割された部分 (A, B, C, …G) ごとに二つのグループ間で比較された。ただしこの分割は、課題終了後の集計作業時に作成されたものであるため、分割部分ごとに色を塗られたわけではない。そこで、分割された部分全てが塗られている場合は「3」、半分程度が塗りつぶされている場合は「2」、一部が塗られている場合は「1」をカウントしスコアとして集計した。

表2に「手」「腕」「頭」「足」「脚」「背中」の「(英語能力の) 下位グループ」と「上位グループ」の平均スコア、括弧内に標準偏差が示されており、アステリスク (\*印) がついてある分割部分に  $p < .05$  の確率で有意差が見られた。すなわち、「手」の C および D の部分 ( $t=-2, 415, df=28, 000, p<.05$ :  $t=-2, 168, df=46, 850, p<.05$ )、「腕」の E の部分 ( $t=-2, 292, df=50, 354, p<.05$ )、「頭」の G の部分 ( $t=-2, 415, df=28, 000, p<.05$ ) で二つのグループ間に統計的に有意差がみられた。「頭」の D, E, H, I は明確な優位差はなかったが、優位確率は有意差にかなり近い値がみられた (それぞれ  $t=-1, 910, df=48, 770, p=.062$ :  $t=-1, 929, df=46, 869, p=.060$ :  $t=-1, 923, df=47, 108, p=.061$ :  $t=-1, 934, df=32, 191, p=.062$ )。

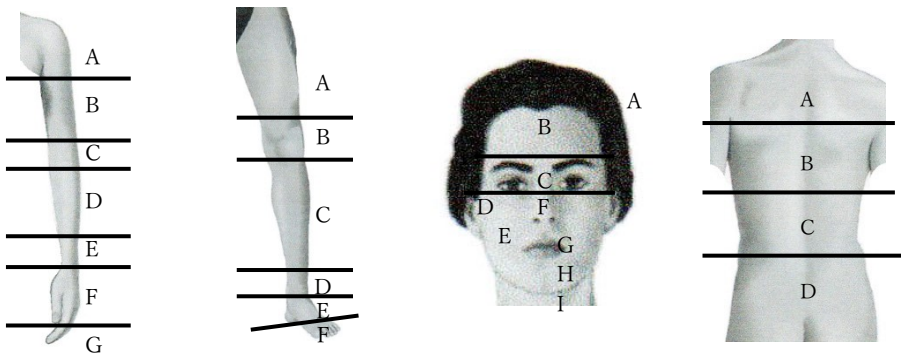


図 2 各部位の分割図

英語学習が日本語母語話者の認知に与える影響：

ボディパーツの切り取り方をめぐって

手	A	B	C*	D*	E	F	G
下位グループ	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	1.00 (0.30)	3.00 (0.00)	2.71 (0.75)
上位グループ	0.17 (0.66)	0.21 (0.77)	0.52 (1.15)	0.52 (1.15)	1.28 (0.84)	2.90 (0.56)	2.52 (0.99)

腕	A	B	C	D	E*	F	G
下位グループ	1.79 (0.72)	2.96 (0.29)	2.88 (0.61)	2.88 (0.61)	0.96 (0.75)	0.21 (0.72)	0.13 (0.13)
上位グループ	1.86 (0.79)	2.93 (0.26)	2.62 (0.98)	2.79 (0.77)	1.52 (1.02)	0.59 (1.18)	0.31 (0.93)

頭	A	B	C	D	E	F	G*	H	I
下位グループ	1.96 (1.10)	1.83 (1.34)	0.42 (1.02)	0.29 (0.86)	0.30 (0.82)	0.38 (1.13)	0.25 (0.93)	0.29 (0.81)	0.04 (0.20)
上位グループ	2.28 (1.03)	1.86 (1.25)	0.97 (1.40)	0.86 (1.30)	0.90 (1.37)	0.86 (1.38)	0.93 (1.42)	0.86 (1.33)	0.34 (0.81)

足	A	B	C	D	E	F
下位グループ	2.00 (1.45)	2.00 (1.45)	2.00 (1.45)	2.01 (1.40)	2.92 (0.29)	2.38 (0.77)
上位グループ	1.45 (1.53)	1.52 (1.50)	2.00 (1.53)	1.66 (1.40)	2.76 (0.52)	2.31 (1.00)

脚	A	B	C	D	E	F
下位グループ	2.71 (0.86)	2.75 (0.85)	2.96 (0.20)	2.25 (0.99)	1.21 (1.44)	0.75 (1.15)
上位グループ	2.76 (0.89)	2.79 (0.77)	2.86 (0.58)	2.28 (1.13)	1.38 (1.32)	0.69 (1.07)

背中	A	B	C	D
下位グループ	1.88 (0.68)	2.79 (0.42)	2.17 (1.24)	0.79 (0.78)
上位グループ	1.90 (0.77)	2.79 (0.41)	2.03 (1.12)	0.59 (0.73)

表2 6つのボディパーツの色ぬり部分の平均スコア（括弧内は標準偏差）

## 5. 考察

まず仮説（1）について考察する。この仮説は次のようなものであった。

- （1）英語能力が上位のグループは英語学習および使用の影響を受け、英語能力の下位グループよりも「手」「足」を示す領域が狭くなる。これは表1にあるように英語では hand/arm と foot/leg の区別をすることから「手」は hand、「足」は foot の切り取り方により近づくのではないかと思われるためである。

「手」に関しては、英語の上位グループの方がより広い範囲を「手」とする傾向があり、上腕から下腕にかけての部分を書いた参加者は下位グループには一人もいなかった。2グ

ループの差は肘から下腕にかけて、すなわち C と D の分割部分に統計的に有意差が見られた。これは仮説に反する結果となった。つまり日本語で「手」というと「肩から指先までの全体」を指すため、下位グループの方がより広い範囲を指すのではないかと思われたが、上位グループの方がより日本語の「手」に近い範囲を塗る傾向にあった。このように、英語を習得することでより日本語話者らしくなるという結果は他の研究にも見られる (Cook, et al., 2003)。すなわち日本語では通常、無生物主語よりは生物主語の方を好むと思われるが、英語を学ぶことによりこの好みがより強化されるという結果を得ている。英語の hand と arm の違いに触れることで、日本語の「手」は英語の arm の部分も含まれることがあるのだ、という意識が働き、「手」の範囲がより強化されたという可能性が考えられる。

「腕」に関しては E の「手首」にあたる分割部分で二つのグループに有意差がみられ、「手首」は「腕」に含まれるとみなす傾向が上位グループの方が強かった。英和辞典で、arm の範囲は「肩から手首までの部分」とするものが多く (青木他、2011; 井上・赤野、2013; 小西他、1987)、hand は「手首から先の部分」とするものが多い (2013; 青木他; 井上・赤野、2011; 小西他、1987)。これでは「手首」が arm に含まれるのか hand に含まれるのかは曖昧である。ところが、『ウィズダム英和辞典第3版』(井上・赤野、2013)には体の部位を示す図が載っており (図3を参照)、手首は arm に含まれている。すなわち、上位グループの方が「手首」までを「腕」に含まれると判断し、これは英語の arm の切り取り方に近くなっている。

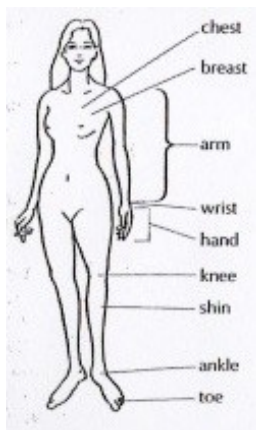


図3 Bodyの図(井上・赤野、2013, p. 215)

次に「足」と「脚」に関してみると、二つのグループの判断には統計的な有意差はなかった。有意差は現れなかったが「足」の塗りつぶし箇所の数値をみると、「足」の範囲が下位グループの方が太腿付近でやや高くなっているため、骨盤から足の指先までを指すという日本語の「足」の切り取り方により近いと言える。この結果に関しては、以下の二つのグループ間の英語能力差との関わりで再度述べる。「脚」の塗りつぶし箇所には、両グループの差はほとんど見られなかった。

次に仮説(2)について検証する。この仮説は以下のようなものであった。

- (2) 英語能力が上位のグループは英語能力の下位グループよりも「頭」「背中」を示す領域が広がる。これは表1にあるように、英語の head には「頭」と「顔」が含まれ、back には「背中」と「腰」が含まれることから、英語による切り取り方により近づくのではないかと思われるためである。

「頭」の範囲は上位グループの方が広いという結果が示された。統計的には「頭」の G の分割部分、すなわち口の周辺にのみ有意差が現れたが、目から顎にかけての部分「頭」に



## 英語学習が日本語母語話者の認知に与える影響：

### ボディパーツの切り取り方をめぐって

含まれると判断した割合は上位グループの方に多かった。すなわち英語の head が示す部分に近くなっており、仮説に則した結果になっている。ここで1点注意すべきは、分割部分 A の数値が下位グループ 1.96、上位グループ 2.28 と比較的低かったことである。頭の部分はすでに黒く塗ってあるため色を塗る必要がないと判断したのか、あるいは頭は「顔の後ろ側」なので色を塗ることができなかつた、ためかもしれない。いずれにせよこの部分を「頭」には含めない、という意味ではないと判断すべきである。

「背」に関してはグループ間にはほとんど差が見られなかつた。分割部分の A、B、C、すなわち肩からウエストラインあたりまでは両グループとも塗りつづす傾向にあり、B の脇の線から一般的に「腰」と呼ばれる部分の上までが最も数値が高かつた。したがって「背中」の切り取り方には英語の影響はみられなかつた。

以上のことから、この実験によって以下の3点が明らかになった。すなわち、英語能力の高いグループは英語能力の低いグループと比較して

- 1) 「手」の範囲がより広く、肘よりも上の部分も含まれると判断する傾向がある。
- 2) 「手首」は「腕」に含まれると判断する傾向がより強い。
- 3) 「頭」の範囲が広く、日本語の「顔」にあたる部分も含む傾向がある。

上のように日本語母語話者が英語を学習したり、使用したりすることでボディパーツの切り取り方に変化が現れることが示された。1) はより日本語話者に近い反応であった。2) と 3) は仮説通り英語の切り取り方に近い反応であった。

「手」の切り取り方が、英語を学習することによってより日本語に近いものになる現象は、英語の arm と hand という二つの語彙によって英語の切り取り方が明示的に示されるため、日本語の「手」は英語の arm と hand のどちらとも一致しないことをより意識するようになるのではないだろうか、と上で述べた。しかしながら同様のグループ間の差は、「足」の切り取り方には見られなかつた。むしろ、統計的な有意差は出なかつたが「足」に腿の部分が含まれるという日本語的な反応が下位グループにみられたのである。この部分で有意差が現れなかつたのは、「手」に見られる英語の arm と hand の区別ほど、「足」の leg と foot の区別が明確に意識されていないのかもしれない。

さらに、「足」の部分で二つのグループに統計的な有意差が見られなかつた可能性として考えられる理由は、実験参加者の英語能力差が小さかつたということである。二つのグループのボキャブラリーテストの平均差は約 22 点であつた。しかし上で示した、日本語話者に見られる英語の影響を検証した別の実験では(Murahata, 2012)、能力別グループを作成するために同様のボキャブラリーテスト(Nation, 2001)を用いられたが、120 点満点で下位グループと上位グループの差は 100 点以上であつた。このように能力差が大きい参加者による実験もさらに必要であると思われる。

結果の 2) 3) に関しては、仮説通り英語の学習がすすみ能力が高くなると英語の切り取

り方に近くなる、という結果を示している。が、果たしてこのように英語の影響を受けたままの状態が止まるのだろうか。今後英語の学習が進むにつれて影響が強くなったのちに、再度弱くなる、ということもありうるかもしれない。その意味で、さらに広範囲にわたる日本語母語話者の英語ユーザを研究対象とすることも必要である。

本研究では、ほとんど日本におけるの教室における英語学習という限られた学習環境ではあるが、その結果ボディパーツの切り取り方という認知的側面に影響を与えるという結果を示した。つまり Cook (1991, 2003) が提唱するマルチコンピテンスという考え方の、第二言語を知っている人たちは一つの言語しか知らない人とは異なるユニークな存在である、という部分を検証することができた。今後さらに、第二言語として英語を学ぶ場合にどれくらいのレベルに達すればそのようなユニークさが現れるのかを検証する必要がある (Murahata, Murahata & Cook, 2016)。

## 6. 結論

体の部位を表す語彙は、言語によって異なり、日本語と英語でも必ずしも一致するわけではない。本実験では、日本語母語話者が英語を学習・使用することによりボディパーツの切り取り方に何らかの変化が現れるのかどうかを、「手」「腕」「頭」「足」「脚」「背中」の部分の色ぬり実験を通して探った。参加者を英語能力で二つのグループに分けて比較してみると、「手」「腕」「頭」の部分で統計的な有意差が見られ、英語を学習・使用をすることで日本語の「手」「腕」「頭」が示す部分に変化するということがわかった。「足」に関する部分では、統計的な有意差が見られなかったが、本実験で比較した二つのグループの英語能力差が、認知的な差を生じさせるほどの差ではなかったという可能性が考えられる。また、このような切り取り方の差が、英語を学習する過程で大きくなったり、小さくなったりするという可能性も考えられるため、今後さらに多くの英語ユーザを対象に研究が進められる必要がある。

## 参考文献

- 青木昭六・島岡丘監修/牛久祐介・竹中龍範・西垣知佳子・八宮孝夫編 (2011). 『サンシャイン英和辞典 (全面改訂版)』 東京：開隆堂.
- 井上永幸・赤野一郎編 (2013). 『ウィズダム英和辞典』 第3版, 東京：三省堂.
- 小西友七・安井稔・國廣哲彌編集主幹/池上嘉彦・堀内克明・米須興文・大沼雅彦編 (1987). 『小学館プログレッシブ英和辞典』 第2版, 東京：小学館.
- 中道真木男編 (2012). 『ベネッセ新修国語辞典』 第2版, 東京：ベネッセコーポレーション.
- 林四郎監修/篠崎晃一編集代表/相澤正夫・大島資生編 (2012). 『例解新国語辞典』 第8版, 東京：三省堂.
- 林巨樹監修/尚学図書編 (1985). 『現代国語例解辞典』 東京：尚学図書.

- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 (2012). 『新明解国語辞典』第7版 小型版, 東京：三省堂.
- Athanasopoulos, P., Damjanovic, D., Krajciová, A., & Sasaki, M. (2011). Representation of colour concepts in bilingual cognition: the case of Japanese blues. *Bilingualism: Language and Cognition* 14(1), 9-17.
- Bates, E. & MacWhinney, B. (1981). Second language acquisition from a functionalist perspective. In H. Winitz (Ed.), *Native language and Foreign Language Acquisition* (pp. 190-214). Annals of the NY Academy of Sciences (Vol. 379). New York: New York Academy of Science.
- Caskey-Sirmons, L. A. & Hickerson, N. P. (1977). Semantic shift and bilingualism: Variation in the color terms of five languages. *Anthropological Linguistics*, 19(8), 358-367.
- Cook, V. J. (1991). The poverty-of-the-stimulus argument and multicompetence. *Second Language Research*, 7, 103-117.
- Cook, V. J. (Ed.). (2003). *Effects of the Second Language on the First*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cook, V. J., Iarossi, E., Stellakis, N., & Tokumaru, Y. (2003). Effects of the L2 on the syntactic processing of the L1. In V. J. Cook (Ed.), *Effects of the Second Language on the First* (pp. 193-213). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cook, V. J. & Li, W. (Eds.). (2016). *The Cambridge Handbook of Linguistic Multicompetence*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Cook, V. J., Kasai, C., Murahata, Y., Sasaki, M., Takahashi, J. A., Hattori, N., Iwai, A., & Minoura, M. (2012). *Categorisation of body parts by Japanese learners of English*. The 22<sup>nd</sup> Annual Conference of European Second Language Association. Poster presentation. Poznan, Poland.
- Ervin, S. M. (1961). Semantic shift in bilingualism. *American Journal of Psychology*, 74, 233-241.
- Laufer, B. (2003). The influence of L2 on L1 collocational knowledge and on L1 lexical diversity in free written expressions. In V. J. Cook (Ed.), *Effects of the Second Language on the First* (pp. 19-31). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Majid, A. (2010). Words for parts of the body. In B.C. Malt & P. Wolff (Eds.) *Words and the Mind: How words capture human experience* (pp. 57-71). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Murahata, G., Murahata, K., & Murahata, Y. (2017). Effects of English learning and use on color imagery in Japanese L2 users of English. *Memoirs of the Faculty of Education, University of Miyazaki*, 89, pp. 1-12.

- Murahata, G., Murahata, Y. & Cook, V. J. (2016). Research questions and methodology of multi-competence. In V. J. Cook & W. Li (Eds.), *The Cambridge handbook of linguistic multi-competence* (pp. 26-49). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Murahata, Y. (2012). *A study of the effects of English learning on cognition in Japanese learners of English from a multi-competence perspective*. (Unpublished doctoral dissertation). Newcastle University, UK.
- Nation, P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Pavlenko, A. (2003). "I feel clumsy speaking Russian": L2 influence on L1 in narratives of Russian L2 users of English. In V. J. Cook (Ed.), *Effects of the Second Language on the First* (pp. 32-61). Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Van Staden, M. (2006) The body and its parts in Tidore, a Papuan language of Eastern Indonesia. *Language Sciences*, 28(2-3), 323-342. DOI: 10.1016/j.langsci.2005.22.013